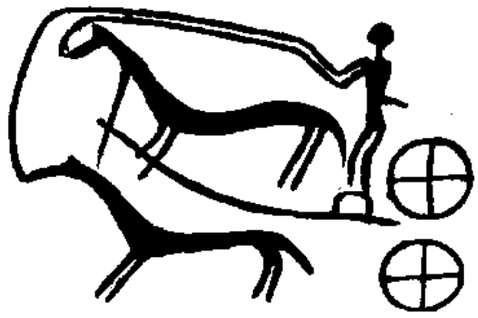
ピーター流外国語習得術

ピーター・フランクル著

IWANAMI
ジュニア
新書

ピーター流外国語習得術

ピーター・フランクル著



岩波ジュニア新書 343

ピーター流外国語習得術　　岩波ジュニア新書 343

1999 年 12 月 20 日　第 1 刷発行
2000 年 2 月 18 日　第 3 刷発行

著　者　ピーター・フランクル

発行者　大塚信一

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電　話　案内 03-5210-4000　営業部 03-5210-4111
ジュニア新書編集部 03-5210-4065

印刷・精興社　カバー印刷・NPC　製本・中永製本

© Peter Frankl 1999
ISBN 4-00-500343-5　　Printed in Japan

はじめに

ぼくがジュニア新書から『ピーター流らくらく学習術』を刊行したのは一九九七年秋のことでした。幸いたくさんの人に読んでいただいて、うれしく思っています。この二年のあいだに、読者から「ピーターの英語勉強法を教えてください」とか「こんどはピーター流外国語の勧めを書いてくれませんか」というリクエストをたくさんいただきました。また、講演会などで出会う全国の方々に、必ずといっていいほど「ピーターはどうやっていろいろな外国語を習得したのですか」と聞かれます。そこでぼくも、自分の経験から見つけ出した方法を公開することで、外国語が上達したいみなさんのお役に立てるかもしれないと思ったのです。

ぼくが大学で数学の講義ができる程度に習得している言葉は、母語であるハンガリー語および英語、ドイツ語、スウェーデン語、フランス語、スペイン語、ロシア語、ポーランド語、日本語、韓国・朝鮮語、中国語の一一か国語です。そのほかにインドネシア語も少しできますから、話せる言葉は合計一二か国語になります。

これらのうち、英語、フランス語など欧米の言語は、ほとんど十代後半から二十代半ばまでに勉強したものです。これらの言語との出会い、それを通した人びととの出会いによって、人生に思わぬ道が開け、いまこうして日本で仕事をし、生活しているぼくがいるのは、なんだか自分でも不思議な気がします。

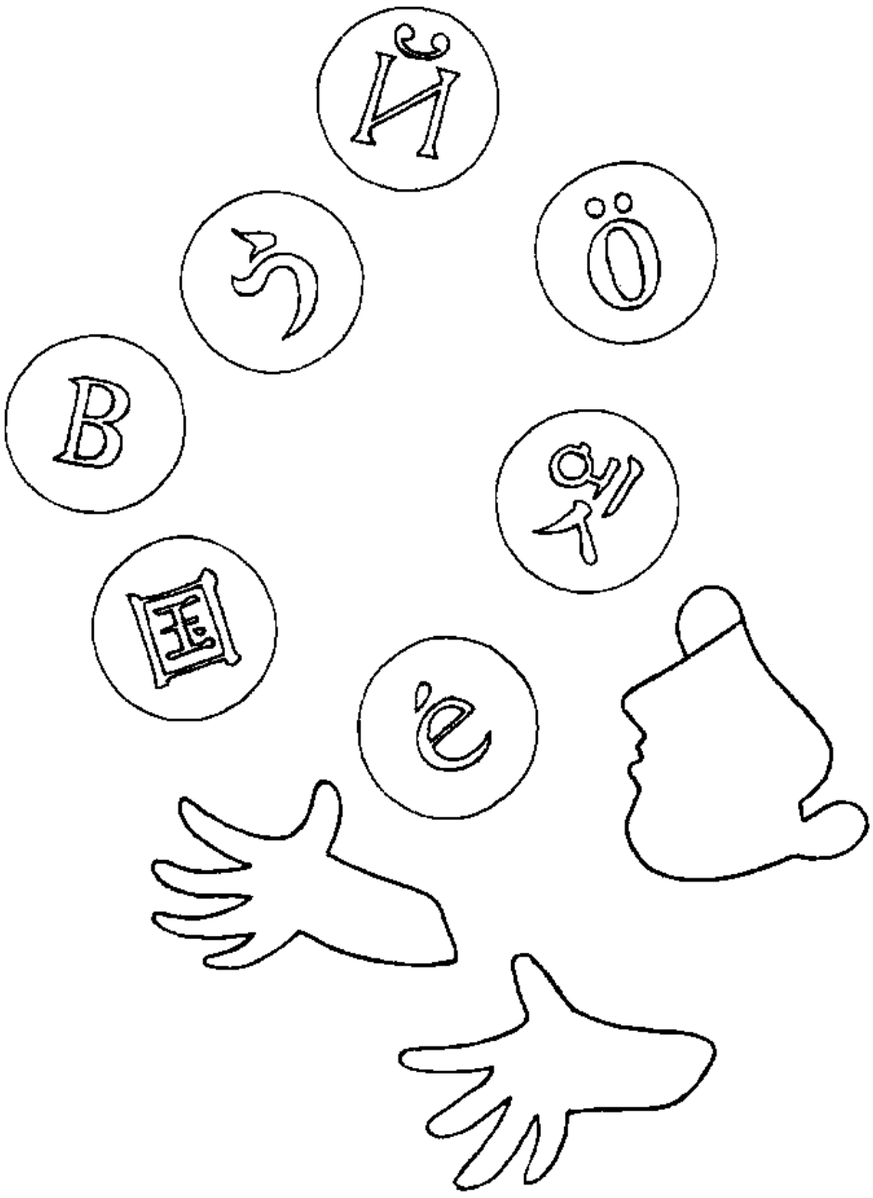
だからぼくはこう思います。外国語は自分の人生を豊かに広げる一生の宝なのだと。若いときにこそ外国語を勉強し、みなさんの人生を楽しく切り開いてほしい、そんな願いをこの本にこめました。

よく「どうしたらそんなにたくさんの言語ができるようになるのですか」と聞かれるのですが、ぼくだって、特別な語学の才能があったわけではありません。あれこれ試行錯誤しながら身につけてきた方法です。そのなかには「わたしもやってみよう」と思うものや、自分にとって最適な方法を見つけるためのヒントがたくさんつまっているはずです。この本がみなさんの英語の勉強に役立つことを願っていますし、英語以外のヨーロッパの言語やアジアの言語にも興味をもってくれたらとてもうれしいです。

みなさんもぜひチャレンジしてみて下さい。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

目　　次



はじめに

1 ぼくの外国語遍歴 1

2 外国語を学ぶ目的とは 57

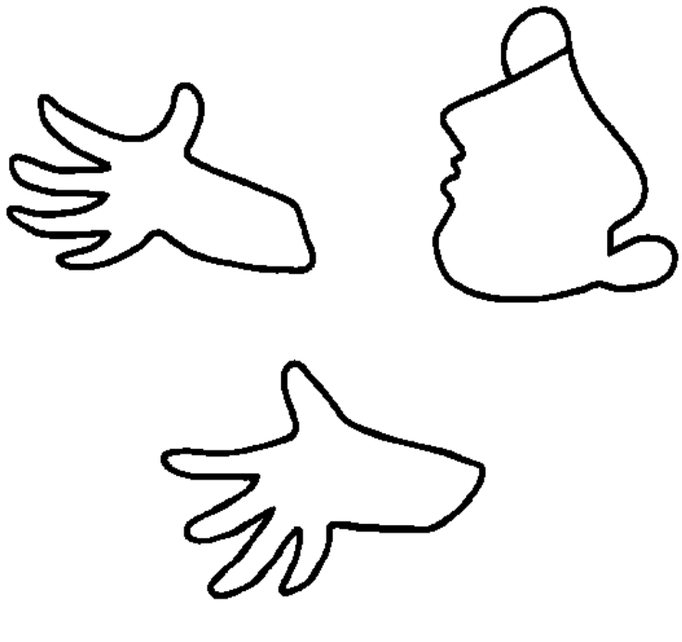
3 語学の才能って何? 81

4 ぼくの体験的記憶術 95

5　時間の有効活用法　113
6　やめてほしい日本人のまちがい　145
7　日本語を磨こう　161
8　国際人になるために　169
あとがき　193

1

ぼくの外国語遍歴



ドイツ語

ドイツ語をはじめたきっかけ

ぼくが初めて勉強した外国語はドイツ語です。ドイツ語はみなさんもご存じのように、ドイツ、オーストリアなどで使われている言葉です。ハンガリーに住むユダヤ人であるぼくがなぜドイツ語を勉強したのか、しかも第二次世界大戦中にユダヤ人にあんなにひどいことをした国の言葉をなんでわざわざ勉強したのかというと、そこにはハンガリーという国の事情があります。

ハンガリーは歴史的に隣国オーストリアと切っても切れない関係があり、しかも、人口がハンガリーの半分強しかないオーストリアのほうが、ハンガリーより経済的にずっと強い国なのです。そして、その向こうにある大国ドイツは、いまでもハンガリーにとっては第一の貿易国でもあるし、ハンガリーに投資している第一位の国家でもあります。ですから、ハンガリーに住むならばやはり、人口一〇〇〇万人しか話さないハンガリー語だけでは長い人生ではたりないから、ドイツ語を勉強しなければいけないということで、ぼくは

ドイツ語を勉強しはじめたころ．小学校１年生

ちょうど小学校にあがると同時に、ドイツ語の家庭教師の家に通うようになりました。

その人はワルネルという名前の、三十代後半くらいの、背が高くて細くて、もともとドイツ系の人でした。マリア＝テレジアの時代、一八世紀の終りごろには、かなりの数のドイツ人が人口が少なかったいまのハンガリーの地方に移住させられて来たのです。じつはぼくの先祖もその時代に同じように、いまのチェコのほうから移ってきたのです。

それはともかく、このワルネル先生はぼくから見ても味もそっけもない人でした。授業の進めかたも、基本的には、最初に簡単な文法をちょっと教えて、そしてわからない単語や新しい単語を一回授業中に書いて、ぼくがその単語を

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

家で三回写し直す、そのようなものでした。

非常に鮮明に覚えているのは、足の骨を折って、二週間ほど入院したときのことです。ベッドの上でまったく身動きがとれず、おしっことかそういうものも全部そのまましなければならない状態だったのに、そこへもこの先生がやってきて、もうほんとうに「かんべんしてくれぇ！」という気持ちでした。で、これでぼくがドイツ語が上手になったかというと、そうでもないと思います。やはり特別に興味があったわけでもないし、自分にほんとうにドイツ語が必要かどうかもまだわかっていませんでした。ですからその後はやったりやめたり、またやったりという状況がつづきました。

五年生になると、ぼくたち家族と同じ集合住宅団地に住んでいる、もとは修道女だったという女性がぼくのドイツ語の先生になりました。同じマンションの中だったから気楽に通えるし、とてもやさしい先生だったからいやではなかった。しかし悲しいことにその先生は癌（がん）にかかって死んでしまい、レッスンも一年未満でとだえてしまいました。

ハンガリーの小学校は八年制ですが、七年生から一年間ちょっとは、こんどは地元の高校のロシア語の先生の家に通ってドイツ語を習うようになりました。その人はもともとドイツ語が専攻で、戦後の時代に合わせてロシア語の教師になった人でした。第二次世界大

戦前のハンガリーにとってはドイツ語が明らかにいちばん大切な外国語だったけれども、戦後はロシア(旧ソ連)の支配下で、国はみんなにロシア語を勉強させようとしたのです。

その先生のもとでいちばん覚えているのは、初めてちゃんとした教科書を使って教えてもらったことです。そしてぼくは自分の単語帳をつくって、単語をたくさん覚えさせられました。先生の家へは歩いて一五分くらいだったから、毎回歩きながら単語帳を見て、与えられた五〇語の単語を一心に覚えていきました。ちょっと会話の練習もあって、たまにはおもしろいなという気持ちが芽ばえていきました。

最初のつまずき

いよいよ高校一年生になって、学校が始まってすぐのころです。ハンガリー文学の先生が、ぼくたちにこう声をかけたのです。「きみたちもこれからの時代には外国語ができないとだめですよ。でも外国語を勉強するのはそうむずかしくない。こうすればいいのですよ」。

どうすればいいかというと、家に戻ったら、たとえばドイツ語ならドイツ語の辞書を出して、大切だとかおもしろいと思った単語を一〇個選んで、単語帳に意味といっしょに書

いておく。これを毎日毎日つみ重ねると、一年では三六五〇個の単語を覚えることができて、これでもうこわいものなし。先生はそう言ったのです。

ぼくは「ははあ、一理あるな」と思って、さっそく実行することにしました。一日、二日、三日、一週間、二週間はけっこううまくいきました。でも、三週間目に入って、なんだかこの単語には見覚えがあるなと思って調べてみると、もう前に書いた単語だったのです。前に学んだものをどんどん忘れていたのです。結局、このやりかたではだめだと、そのとき気づきました。

コンピュータだったらこれでいいのです。ゆっくり入力しても、いっぺんに全部入力しても、コンピュータが故障さえ起こさなければずっと記憶していることができます。人間の頭はちがう。やはり物事を忘れるのです。とくにこのように単語を一つ一つというのは覚えにくいものです。

余談になりますが、ぼくが初めて日本に来たときに、原宿の喫茶店で隣の席にすわっていた男性が英単語帳を丸暗記しようとしているのを見て、すごくびっくりすると同時に、とてもかわいそうだなと思いました。それから一〇年以上たったいまでも同じような情景に出くわします。ある日電車に乗ったら、隣にかわいい女の子がすわっていて、彼女もや

っぱり単語帳を丸暗記しているのです。「ぼくがちょっと教えてあげましょうか」と声をかけてみたのですが、「いいえ、いいえ、いいんです、これを覚えますから」と言う。

実際にその単語を使って何かを説明するとか、会話のなかで覚えるとか、そうやって単語に接着剤がついて脳のどこかになんとかくっつけることができるのですが、単語そのものだけではやっぱり豆でお城をつくるようなもので、すぐにバラバラとくずれてしまいます。ぼくも最初は同じことをやって、これではだめだとあきらめたのです。

三週間ドイツ語づけに

ぼくのドイツ語の勉強を大きく前進させるできごとが、単語丸暗記法で挫折したその年、高校一年の夏にありました。ハンガリーでは毎年夏休みが二か月以上もあり、しかもそれはほんとうの意味の休みで、先生も学校に行かないし、学校の門に錠前がかかってだれも入れない状態になります。ぼくはその時期はほとんどいつも、ハンガリーのいちばんの行楽地バラトン湖のほとりにある小さな粗末な別荘のなかで過ごしていました。

その年の七月の三週間、オーストリア人の夫婦が子どもといっしょに別荘に遊びに来ました。ご主人の名前はヘルムートさんといって三〇歳くらい、奥さんのリジさんは二四歳

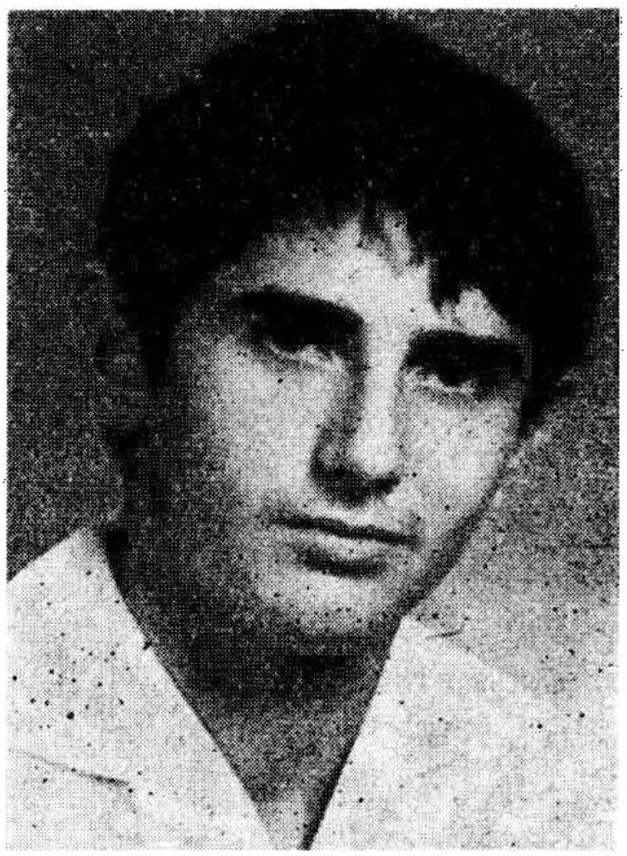
で、四歳の子どもがいました。ぼくもその別荘にずっといたから、彼らと時間を過ごすことになりますが、彼らはハンガリー語がひとことともわからない。どうしてもぼくのほうがドイツ語を使わなくてはならなくなりました。

ヘルムートさんは、なんだか不思議な人でした。毎日一九時間働いて五時間しか寝ない生活を一年間つづけていたから、少なくともその夏休みは一年分の寝だめをするのだといって、一日十何時間も寝ていました。たまに夜起きると愛車のフォルクスワーゲンで最高速度が六〇キロのところを一二〇キロくらいですっ飛ばして、隣に座っていたぼくもスリル満点だったし、頭を使うトランプのゲームを教えてもらって、ぼくが勝つとあまり負けた経験がなかった彼がむきになったりして、とても仲よくなりました。

そしてヘルムートさんとリジさんの提案で、ファースト・ネームでおたがいを呼びあうことになったのです。だからいまぼくも実際彼らのラスト・ネームを覚えていないくらいです。また、ドイツ語では、相手のことを呼ぶときの二人称代名詞に“Sie”(「あなた」に相当)と“du”(「きみ」に相当)の二種類があって、偉い人やよく知らない人には必ず「ジー」と言って、ごく親しい人には「ドゥ」というふうに使い分けるのですが、二人の提案でそれも「ドゥ」でいこうということになりました。

ぼくはまだ一五歳なのに大人に向かって「ドゥ」と言ってもいいというのは、とても新鮮なことでした。ぼくの前に知らない世界への窓がパッと開いた気がしました。ドイツ語という武器をもっていれば、自由で楽しい彼らの人生観を学べるというのが、ドイツ語を勉強する大きな原動力となったのです。

じつは、その五年後にはヘルムートさんは働きすぎで死んでしまったのです。日本語でいう「過労死」とまったく同じように、働いて働いてある日突然心臓が停まった。まだ三五歳でした。



ヘルムートさん一家に出会ったころ

こんなふうに一心にヘルムートさんの話をしましたが、なにを隠そう、女性とつき合ったこともキスしたこともまったくなかった当時のぼくにとって、いちばん興味があったのは、とても美人であるリジさんのほうでした。

ヘルムートさんは一日中寝ているから、ぼくはリジさんと息子のアレックスくんといっしょに、バラトン湖に行って、寝ころんで話

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com